

お彼岸

平成30年3月第3週放送

今日から春のお彼岸です。一年の間^{あいだ}には、かつて何度もご先祖様にお参りをする節目がありました。数え年の時代には、新年が明けて一つ歳^{とし}を重ねたことをご先祖様に報告し、春のお彼岸には季節の移ろいを感じながらお参りをしました。

地域にもよりますが、田植えに時期には赤飯を炊いてご先祖様にお供えし、お盆のお墓参りをし、秋のお彼岸を過ぎて稲刈りが終わると新米をお供えして感謝の気持ちを捧げる…。そして年末には、大掃除が終わるとお墓もきれいにお掃除をして一年の無事を報告し、お礼のお参りをしてきました。

こうして振り返りますと、ご先祖様への挨拶は欠かせないものだったことが分かります。

その中でも、春と秋のお彼岸は、特別な意味合いを持っています。

太陽が真東から昇り真西に沈むという、季節の節目だからです。

“東”は私たちが生きている「此岸」、対する“西”はご先祖さま方がいらっしゃる^{ほとけさま} 仏様の世界、即ち「彼岸」に喩えられて来ました。東から西へ太陽の通る距離が一番短いことから、ご先祖様により近い場所でお参りしたいという思いと重なり、北関東では高い岩山^{いわやま}の上にあるお寺に初彼岸にお参りすると、亡くなって新しい仏様になった故人に会うことができるという信仰もあります。

お盆には、迎え盆^{むか ぼん}の時期に帰って来るご先祖様を提灯でお墓に迎えに行き、自宅へお招きしますが、お彼岸は、こちらからご先祖様のところへ会いに行くのです。彼岸の入り・お中^{ちゆうにち}日・彼岸のあけと、一週間に三度もお墓参りをする習慣があるのは、そういった意味があるからなのです。

道元^{どうげん}禅師は『正法眼蔵^{しょうぼうげんぞう}』「仏教^{ぶつぎょう}」の巻で、「彼岸に到る」ではなく「彼岸が到る」という“彼岸到”という言葉を用いて、修行の場がすなはち「彼岸」、さとり^{ひがんとつ}の世界であるとお示しになりました。“此の岸”と“彼の岸”の間は遠く離れていと捉えるのではなく、修行することでその間は無く、だからこそ修行の志^{こころざし}を奮^{ふる}い立たせるには、お彼岸は絶好の機会なのだと教えてくださっているかのようです。

もちろん道元禅師は、お彼岸だけに限ることなく日常における修行の大切さをお示しになっているのですが、特にお彼岸が修行の上で大切なことを改めて感じさせてくれるのです。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

お彼岸には、お墓に足を運び、ご先祖様に親しくお参りをして、心から故人を偲こじんび、命の受け継ぎやご縁の繋がりに感謝を申し上げ、教えの道を正しく歩んでまいりますと、お誓いする機会としたいものです。

— 終 —